

# 吉備の国—岡山

## —再発見—岡山の旅概説—

野口冬人

### はじめに

南は瀬戸内海に面し、古くからの国道であった山陽道が吉備、岡山、倉敷を結んで、古代吉備王国を形成していた。北部は中国山脈へ続く美作の国から蒜山山脈へと山波を連ねている。

その間を吉井川、旭川、高梁川の三大河川が瀬戸内海へと流れ込んでいる。かつてはこれらの河川を航行する水運も盛んであったといわれる。

吉備の国というのは、黍(きび)を耕作していたことから生じたというのが一般的な説になっている。備前、備中、美作、備後(現在の広島県)、瀬戸内海の島々などが、吉備の国の勢力範囲とされている。

この豊穡な地は、古代から大和と並び称される独自の文化を育んでいた。大和国に対する吉備国は一つの独立した国家として栄えていた時代もあった。

和歌森太郎編の『増訂日本歴史事典』昭和三十三年六月二十五日、実業之日本社刊にみると、つぎのように解説している。

岡山県に属する備作三国は、南を瀬戸内海の優美な海と島により形成され、東は播磨国(兵庫県)、西は備後国(広島県)に接し、北は標高10000呎を越える後山、三国山、津黒山、蒜山、道後山など東西に連なる中国山脈によって、鳥取県に接している。

### 古代吉備国の繁栄

備中国分寺を中にはさんで東西に築かれた加茂の造山古墳と三須の作山古墳は、いずれも機内にある天皇陵と肩を並べる巨大な古墳である。それから推測するに、五世紀前半の吉備豪族の繁栄ぶりは、かなりのものがあつたと思われる。

吉備一族はいつ頃から台頭し、いつ頃まで栄えていたものであろうか正確には分かっていない。

その源流にはさまざまな説がある。

一つは、北九州の族長国家が畿内に侵入して建てた政権だとする説。

一つは、朝鮮半島から渡来した騎馬民族の建てたとする説。

\*

『記・紀』にみえる吉備国は、政治的にも文化的にも、大和朝廷と対峙する勢力圏を持っていた。

雄略天皇(第二十代)の時代になると、『日本書紀』や『古事記』に「吉備上道臣田狭(たさ)の乱」などが記され、吉備勢力の鎮圧が繰り返されている。吉備

きび〔吉備〕現在の岡山県と広島県の一部を含む地域の古名。古代においては、西方の笹か瀬川流域(賀夜地方)と高梁川流域(下道地方)が中心で、古墳時代に吉備臣一族が吉備王家として、ここに君臨していた。大和朝廷の勢力の西漸に伴ない、この吉備国は屈服させられ、国造として隷属せよとしたこともあった。六世紀にいたり大和朝廷は、半島情勢の緊迫に伴ない、この吉備国に屯倉(みやけ)の網を張りめぐらし、児島に田令として葛城氏(蘇我一族)を駐在させて、これを直轄領とした。かくして吉備臣一族は吉備王家としての旧勢力を失い、笠氏、下道氏などは中央官僚社会に進出し、賀陽(賀夜)氏は吉備津神社の祠堂として残った。これら吉備臣一族は蘇我氏に寄生して、大化改新後は反改新みうちの一翼として反逆を試みたこともあるが、まもなく吉備は律令国家の一細胞として解消し去り、七世紀には、備前、備中、備後に分割されてしまった。

現在の岡山県の地域は、古代に分割された備前、備中、美作、備後のうち、備前、備中、美作の三国を範囲としている。備後は広島県に組み入れられている。

国は一大勢力となつて大和朝廷をおびやかしていたことがうかがわれる。

吉備地域の各地には、古代吉備王国の繁栄をしのばせる伝承や史跡が多く伝えられている。

吉備風土記の丘県立自然公園や吉備史跡県立自然公園が設定されて旧山陽道をたどる吉備路が設けられ、史跡と伝承をテーマにした観光資源が少しずつ脚光をあびている。

吉備の中山の東麓には吉備津彦神社、西麓には吉備津神社があり、美作には中山神社があつて、これらは、いずれも吉備氏の祖神、吉備平定のための畿内大王より派遣されたと伝える四道將軍大吉備津彦命をまつている。それぞれ備前の一の宮、備中の一の宮、美作



吉備路の吉備津彦神社



は、大和朝廷が確立し、律令国家の成立とともに、大和朝廷の勢力の中に組み込まれて行く。

五世紀後半の頃から吉備豪族は畿内政権と張り合いく度となく反乱を繰り返した。その頃、畿内政権では氏姓制度によって朝廷の官司制度を整え、六世紀になると大臣、大連の職を設け、大伴、物部、平群、蘇我などの畿内の豪族が政治の実権をにぎるようになり、地方政権は、次第に朝廷の政権の座から遠ざけられて行った。

政権から遠ざけられつつあった吉備一族は憤懣が積もり、継体天皇の時に反乱を起こしている。そして反乱は失敗し、吉備豪族の没落へとつながって行く。

六世紀中ごろ、欽明天皇の時代に、朝廷は大連蘇我稲目を吉備につかわして、白猪屯倉と児島屯倉を設けた。屯倉というのは天皇の直轄地をいう。

大海人皇子と大友皇子の間で皇位継承を争った壬申の乱（六七二年）ののち、大海人皇子は天武天皇（第四十代）の時代に入る。朝廷は吉備勢力の切り崩しをはかり、吉備国は備前、備中、備後に分割される。さらに下って和銅六年（七一三）備前の北部を美作に分けて、四つの国として政府の支配に服することになる。

こうして吉備国はすっかり衰退してしまふのであるが、一方では都の文化を受け入れて、国分寺、国分尼寺の造営をはじめ、各所に地方豪族の私寺が次々と造られて行った。華やかにも独特の吉備文化が築かれて行くのである。



鬼ノ城・復元された西門  
鬼神「温羅(うら)」が住み家とした鬼ノ城

の一の宮と称されている。  
面白いことに、その末社の御前宮（御前宮・吉備津彦が退治した鬼神をまつる社）がかならず併置されていることだ。

桃太郎伝説は、吉備津彦の鬼退治に関する伝承によるものである。吉備津彦の吉備平定に最後まで抵抗したのが温羅（うら）という鬼神だった。空中を飛び、備中新山の鬼ノ城にすんでいた。吉備津彦は吉備の中山に布陣し、抵抗する「うら」を追い詰めて遂にしとめた。

桃太郎伝説は、吉備の中山のふもとの備中と備前の吉備津神社を拠点にして、のちに全国へと伝播した人気の物語となつて行ったものである。

吉備の国に悪行のかぎりをつくしていたという「温

羅」を退治した吉備津彦は、死後吉備の中山に葬られ、その子孫は吉備の首長となつたと伝えている。

\*

四世紀の末頃から畿内政権は、大規模な朝鮮侵略をはじめ、新羅、百濟を征服して高句麗の軍と戦い、六世紀の中ごろ、欽明天皇の時代には朝鮮半島の支配をしていた。

吉備豪族は、朝鮮からの渡来人や朝鮮文化を持ち帰って、吉備文化の発展に大きく役立った。半島侵略にはぼう大な水軍が動員された。畿内政権ではこの水軍をどこから調達したかという点、吉備豪族の率いる水軍が大きく活躍したのと思われる。吉備地方沿岸に多く残る竪穴古墳群に眠る豪族たちは海上を支配した豪族と解釈され、朝鮮侵略に重要な役割を果たしてきたと推察されている。

吉備政権の発展に果たした吉備水軍のもたらした朝鮮文化の影響というのは大きなものがあり、それらを育て上げた経済的な条件は、たたら道として伝わる鉄であり、瀬戸内沿岸の塩業であった。

\*

吉備豪族の源流は、北九州からの進入と、朝鮮半島からの騎馬民族の渡来の二説があることは先に述べたが、『日本書紀』によると、皇別の氏族で、大和の天皇と親近の関係にある氏族ともみられているとの説もある。しかし吉備地方のはえぬきの豪族であった吉備氏

### 岡山の発展に重要な山陽道の発達

律令国家の成立とともに、都と各国を結ぶ官道の整備が進められた。山陽道もその一つとして、重要な道の一つに上げられた。三十里（約十六キロ）ごとに駅が設けられ、駅馬が整備された。駅を中心として宿泊施設が置かれ、官人や公文書の伝達には、駅鈴を持った駅使がそれに当たり、駅馬の調達や駅子の提供を司った。

外交使臣の京への道に当るところから山陽道は重要度の高い道とされていたが、そのため駅家には、瓦葺き白壁の駅舎とするなど、次第に費用もかかるようになり、やがてその維持にも苦勞するようになる。さらに大同の改制以後は、新任国司の赴任は海路を使うことが多くなつた。駅路の利用は自然にへつて行った。

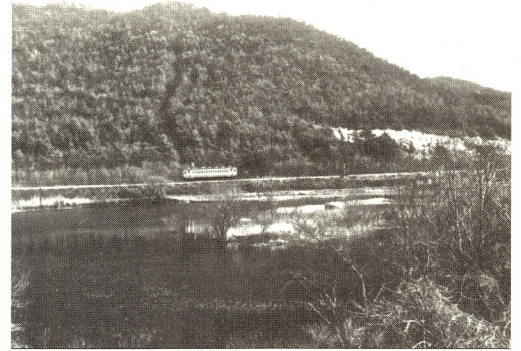
\*

兵庫県（播磨）と岡山県（備前）を分けているのは、船坂峠（一九〇七メートル）で、古くから「山陽第一の難所なり」といわれていた。

船坂峠を西へ下ると、およそ十一町（一・二キロ）で、備前国に入って最初の宿駅三石がある。幕末の頃は、本陣、脇本陣、問屋場、高札場などがあり、一二〇軒余の宿屋もあったと記録されている。

三石宿の西方、八木山峠を越えて伊理中集落に入ると、寛文十年（一六七〇）岡山藩主池田光政が子弟教育の場として、創設した「閑谷学校」がある。松林に





同和鉱業片上鉄道。今は廃線になってしまったがかつては一面編成で走っていたローカル私鉄だ

囲まれた静かな小山間盆地にある。なまこ壁の石築塀は重要文化財指定、構内は特別史跡になっていて、講堂、小斎、習芸斎、飲室、文庫ともに国定指定になっている。備前市の片上宿は、昭和七年に鉱石輸送のために開通された棚原―片上間三三・八キロの片上鉄道が走っていたが、今は廃線になった。片上宿は古い

港町でもあって、美作国の税物は、片上港から積み出されていた。享保八年（一七二三）には江戸への廻米の輸送にもあたられ、伊部焼の多くも片上港から全国へ積み出されていた。備前焼の生産地として多くの窯のある伊部から大内を経て、香登に入ると、吉井川沖積平野が開けて稲作地帯となる。香登から西へ進むと吉井川東岸に達する。八日市村（長船町）で、山陽道が芳井川を渡河するところで、船渡しがあった。吉井川の西岸は一日市場（ひといちしゆく）でここから岡山市へ入る。古くは一日



鳥城と呼ばれる岡山城

市渡しがあったが、現在は国道二号線の備前大橋が渡っている。備前大橋の西土手上に一里塚の榎の巨木が立っている。備前長船の名刀や刀工居住地として福岡は商業都市として発達、備前長船、福岡一文字派の刀工、刀鍛冶の繁栄をみせる。また福岡は山陽道の要衝として、たびたび合戦の地にもなってきた。水田の広がった中に山陽道は続き、浮城の名を持つ沼城跡、鉄の生産地でもあった藤井宿を抜けると、百間川の防波堤がある。百間川は、旭川の分流だ。洪水時に活用される放水路で児島湾へそそぐ。百間川の土手に立つと岡山城が望まれる。岡山城は十六世紀中頃に、金光氏の居城として石山にあったが、元龜六年（一五七〇）に宇喜多直家に占領され、秀家の時代に入って、慶長二年（一五九七）に天守閣が造られた。鳥城、金鳥城などと呼ばれた。さらに池田氏へと続き、旭川本流を本丸の東側へ移し変

手立つと岡山城が望まれる。岡山城は十六世紀中頃に、金光氏の居城として石山にあったが、元龜六年（一五七〇）に宇喜多直家に占領され、秀家の時代に入って、慶長二年（一五九七）に天守閣が造られた。鳥城、金鳥城などと呼ばれた。さらに池田氏へと続き、旭川本流を本丸の東側へ移し変

えて、外堀の役割を果たさせた。城門二十四カ所、楼櫓三十一カ所に及び大規模にまり、現在へと続いている。慶長年間建立の西の丸西北隅の隅櫓、元和・寛永の頃の本丸西北隅の通称国見櫓などは重要文化財指定になっている。

宇喜多直家、秀家、池田氏の治政時代に城下町は発達、整備されて行った。山陽道は城下町開発のためもあって、藤井宿から街道を南へ下げて、城下町を貫通させた。角町の街道筋両側には町人町を整備し、商業の発展をはかった。

旭川の対岸の後楽園は、岡山藩主池田綱政の時代に作庭された日本三台名園の一つに数えられる林泉廻遊式庭園であった。一般の入院は許可されなかったが、十八世紀になかった中頃には一般町人も入園できる時期もあったといわれる。

### 岡山県の三大河川

#### ―吉井川、旭川、高梁川―

岡山県は瀬戸内海に注ぐ、吉井川、旭川、高梁川の三つの大河川とその流域によって形成されている。

その河川による水運にそれぞれの町の町の発展に大きくかかわっている。古くは物流の多くは河川を航行する舟便によっていた。

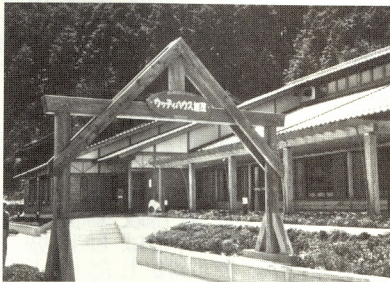
#### 吉井川

瀬戸内海児島湾に注ぐ芳井川は、岡山市と瀬戸内・

備前市などを分ち、吉井川中流県立自然公園を経て、片鉄ロマン街道（旧片上鉄道跡）に沿って北上、吉井の地の城山公園で吉野川を右へ分けている。左へ登って行く本流は、中国自然歩道の抜ける棚原ふれあい鉱山公園などをみて、北上したところが津山の城下町だ。津山は岡山からの津山往来と、鳥取との県境の地形峠を越えてくる倉敷へ抜ける伯耆往来、そして出雲へ抜ける出雲往来などの交差する、交通の要衝であり、美作の国の中心地ともなっている城下町、宿場町としての歴史の地だ。

吉井川にかかる今津屋橋を渡ってまっすぐ歩くと津山城跡のある鶴山公園である。織田信長の小姓森乱丸の弟、森忠政の居城跡で、十三年の歳月を経て、元和二年（一六一六）に完成されたと伝えている。

吉井川は津山で西へ出雲往来に沿う久米川と、いったん東方へ流れを帰る加茂川に大きく分かれる。加茂川は吉井川と分かれたあと、因美線に沿って北上し、農山漁村滞在型交流施設のウッディハウス加茂のある加茂で倉見川を北に分け、東に大きくまわ



ウッディハウス加茂





古い町並みをみせる中国勝山

湯原温泉郷は、真賀温泉、足温泉、ダム下の河原の露天風呂が人気の湯原温泉と続く。

り込んだ加茂川は、大高下ふるさと村、阿波の黒岩高原へと詰める。

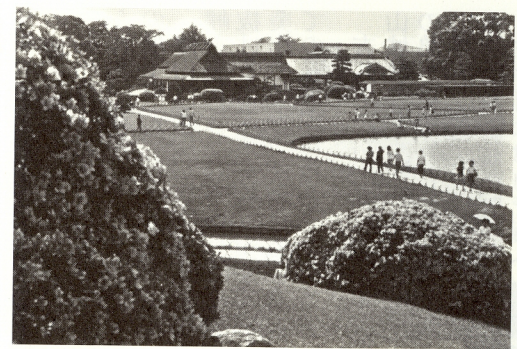
一方吉野川は、美作市の湯郷温泉を展開し宮本武蔵生誕地、武蔵資料館などのある宮本、大原を経て、後山川と名を変え、東栗倉、西栗倉の氷ノ山後山那岐山国定公園の地へと広がって行く。

吉井川はかつて津山からの舟運の往来は盛んであった。美作国山間地の年貢米は、吉井川を下る高瀬舟で河口の金岡港へ運ばれ、海船に積み替えられて大阪、江戸へと向かった。途中の吉ヶ原、飯岡(棚原)などには船蕃所があつて、積荷運上金が徴収されていた。

### 旭川

児島湾を囲むように、金甲山、貝殻山などをそびえさせたせる玉野市の親指を立てたような児島半島にぶつかるように児島湾へ注ぐ旭川は岡山城の裾を洗うように流下している。その水源は、真庭市の湯原温泉、湯原湖、さらには津黒高原、蒜山高原にまで及ぶ大河である。

岡山も市街地は、旭川下流の沖積平野に発達した。吉備文化の全盛期には、旭川の西側に三野臣(みぬのおみ)、被害側には上道臣(かみつみちのおみ)などの吉備豪族が精力を張っていた。下つて戦国時代には、松田氏の武将金光宗高が、現在の市街地の中心である石山に城を築いた。金光宗高は天正二年(一五七四)に、宇喜多直家に



後楽園

滅された。直家は岡山城を築き、山陽道を城下の中心を通るように付け替えた。それによって岡山下は大きく発展する。直家の子秀家も城を改築し、武家屋敷、町屋などを整備、備前の中心都市として繁栄した。小早川氏から池田氏へと変わり、三代目の光政は土木事業に力を入れ、百間川を開設するなどして、それまでのしばしばの洪水に対処した。旭川を外堀のようにして建つ岡山城は、鳥城と呼ばれる天主台にそびえる大櫓は三層六階のみごとなものであるが、昭和四十一年(一九六六)の再建である。

岡山城から旭川をへだてて指呼の間にあるのが、国特別名勝指定の後楽園である。約四万坪といわれる敷地のまわりに竹林をめぐらしている。後楽園に入ると、広々とした芝生がひろがって、中島を浮かべた池をめぐり、庭園内を回遊する小川が走り、延養亭、廉池軒、観騎亭、能舞台などの建物が点在し

巧みな空間をつくり出している。庭園の中央の唯心山へ登ると園内が一望にできる。

池田綱政(光政の子)が、津田永忠に命じ、貞享三年(一六八六)から元禄十三年(一七〇〇)にかけて作庭した大名庭園である。江戸初期の池泉回遊式庭園の代表的な存在として知られている。

後楽園の名称が付けられたのは、明治四年(一八七二)からで、それ以前は菜園場(さいえんじょう)、御菜屋敷と呼んだといわれる。

岡山市の街を抜けると、津山線が付かず離れずして北上し、岡山空港の東で宇甘川を分け、八幡温泉を見

ると、津山線に分かれ、吉備清流県立自然公園から、中国自動車道の落合、勝山と通って湯原温泉郷へと入って行く。

勝山は古い町並みが残り、その支流の奥には名勝神庭の滝が山あいにかかっている。

倉敷の水島灘に注ぐ高梁川は、新見からの物資の輸送に欠かせない高瀬舟の往来の盛んだった河川である。高梁川を往来する舟は、新見―松山間と、松山―玉島港の二つに分けられていた。すなわち新見からの舟の積み荷は、いったん松山で、河口までの舟に積み替えられた。継船制といわれた。運ばれた物資は年貢米をはじめ、銅、鉛、煙草などの生産品で、帰路は、倉敷からの塩が主であった。江戸時代、玉島港は、備中松山藩の外港として、重要な役割を担ってきた。松山から高瀬舟で運ばれる物資は、玉島港で大阪、江戸、あるいは北前船などによって各地へ運ばれた。河口の玉島大橋の手前右岸側に円通寺公園があり、国民宿舎良寛荘がある。良寛ゆかりの円通寺があり、新町、仲寛町など、古い問屋町の家並みが続く。

### 高梁川

湯原の入り口、下湯原で左へ分れて行くのが鉄山川で、出雲街道の新庄へ結ぶ道が川沿いに続き、一般にはほとんど知られない茅森の湯露天風呂、郷緑温泉の一軒宿などがある。湯原温泉は、奥津温泉、湯郷温泉と合わせて「美作三湯」の一つとして、この方面の代表的な温泉郷である。吉備清流県立自然公園へ戻って、鶴田で北へ分かれて行くのが打穴川、その少し下流の川口から津山街道沿いに誕生寺川が分かれている。



玉島周辺は、水谷氏が寛永十九年（一六四二）に備中松山藩主に入って以降、三代にわたって、干拓事業を進め、新しい陸地を造成して行った。陸地は新田として開拓された。したがってその間に用水路が設けられ、高梁川の水を引き入れた。用水路は水運としても利用され、次第に拡張、整備された。倉敷市の羽黒山の麓までの「高瀬通し」が開通し、終点には舟だまりもでき、陸揚げされた荷物は千石船に積み替えられて各地へ送られた。こうして玉島は備中の玄関口として発展して行った。

倉敷から山陽自動車道をくぐって、伯備線沿いに北上する高梁川は、古地で井原鉄道が渡り、総社を経て、備中高梁へ入って行く。左からまず成羽川が合流し、



井倉洞入口横の滝

備中高梁の城下町を抜ける。井倉峽などの名勝をみると、小坂部川、西川などを分流して新見へ入る。

新見は、岡山西北部の中心的存在の都市である。昔からこの奥地周辺の物資の集散地になっていて、集められた物資は、高瀬舟で備中松山へと運ばれ、さらに舟を変えて河口の玉島港へ積み出された。

伯備線沿いに源流へとたどると、広瀬湖畔森林公園が広がり、神郷温泉の施設がある。一方高梁川の水源は千屋牛の名産地で、新見千屋温泉「いぶきの里」の施設が開発されている。

#### 参考文献

『増訂日本歴史事典』和歌森太郎編 昭和三十一年六月二十日、実業之日本社

『岡山の歴史』柴田一著、昭和四十九年五月二十日、日本文教出版株式会社

『山陽鉄道案内』昭和五十三年四月一日、山陽鉄道案内版保存会（復刻版）

『歴代天皇総覧』笠原英彦著、二〇〇一年十二月七日、中央公論社

『吉備と山陽道』土井作治、定兼学編、二〇〇四年（平成十六年）十月二十日、山川出版社

『岡山県の歴史』藤井学、狩野久、竹森栄一、倉地克直、前田昌義共著、二〇〇六年六月五日、山川出版社